
《コルビー詩編》に於ける文字装飾の伝統と異教図像の源泉
—第51編イニシアルQ「アンチキリスト」を中心に—

《コルビー詩編》(アミアン市立図書館、Ms. 18、以下、本作品)は、9世紀初頭にコルビーの修道院で制作された詩編本であり、その各編冒頭を飾るイニシアルは計156点が現存する。これらのイニシアルは、島嶼写本に起源を持つ組紐文や動物文、大陸のメロヴィング朝写本に由来する鳥魚文という、先行する文字装飾のモチーフを踏襲するのみならず、そのうちの幾つかは、新旧約聖書の物語場面や、詩編の内容を喚起する図像を表す。この多様な文字装飾と図像表現との混交は、カロリング・ルネサンス開花期にあつて、一見異色の様相を呈している。

従来の研究に於いて本作品の様式は、非古代主義的な〈バルバロイ〉の芸術とJ・ポルシェが位置付け、古典古代の復興を基調とする同時代の芸術的潮流に反したアナクロニズムとO・ペヒトが称したように、カロリング朝の〈刷新〉前夜の芸術であることが強調されてきた。他方、U・クーダーを中心とする図像学的研究では、図像と詩編本文との照合、及び同時代の他の詩編挿絵との比較を主とした、詩編内容の視覚化方法の分析が試みられてきた。しかし詩編本文に明らかな典拠を持たない図像については、同時代の詩編挿絵に於ける類例の欠如もあり、単にその独創性が強調されるに留まっている。

本発表は、こうした特異な図像生成の経緯を、以下の二点からより具体的に解き明かそうとするものである。第一に、本作品を特徴づけるイニシアルという挿絵形式に傾注する。発表者はこれまで本作品を、イニシアルの構成原理という点から分析してきたが、文字装飾の伝統を踏襲したこの写本画家の、具象モチーフを組み合わせて文字を形成するという常套手段は、詩編の視覚化に際する図像選択の前提条件となった筈である。第二に、詩編以外の図像典拠に着目する。カロリング朝という時代の気運を鑑みるならば当然、異教図像まで含めたその源泉が検討されねばならない。

その具体例として、第51編のイニシアルQを取り上げる。絡み合う二匹の獣によって構成される文字の開口部には、手綱を握り冠を戴く玉座の人物が表されており、この図像は注解書を介して「アンチキリスト」と理解される。文字の形状に合わせて詩編内容を新たに絵画化する必要があった写本画家は、他の詩編挿絵とは異なる主題を選択した。この図像について『ヨハネ黙示録』の「バビロンの大淫婦」との近似は既に指摘されているが、更に個々のモチーフに着目するならば、古代から伝わる神話図像等の作例を手本とした可能性が指摘できる。ここではアンチキリストの図像伝統に連なるモチーフが、イニシアルQの上に詩編挿絵として再構成されているのである。文字と図像との統合に於いて、古代の異教図像を詩編の挿絵へと変容させているその点で、本作品は単にバルバロイ芸術の遺産であるのみならず、まさにカロリング・ルネサンスの所産と言えるだろう。